

## はじめに

直感を主題にして筆者が論じた本は今回が五冊目である。発行順で既刊書の題名を振り返れば、『心の問題』と直感論』『直感分析論・言葉』と「心」の領域』『直感分析法』の原点と拠点』『続・直感分析論・行動』と「身体」の領域』である。二冊目から四冊目までは「直感分析」について論じたものである。

初刊本が「心の問題」に関連して「直感」概念について論じてあり、それらを挟むようにして今また新たに「神話・民話」に関連して「直感」を論ずることとなっている。このことに特段の意味があるわけではないが、これら一連の試みが「直感」概念を一貫して主題にしていることも改めて浮かび上がる。現にこれまで「直感分析」とは「直感が直感を分析することであると繰り返し述べてきた。このことの意味はそこに分析方法としての「直感」と分析対象としての「直感」が同時に存在しているということである。これは一つのジレンマであって、そこで現に「直感」があつて分析を始めているのだが、その対象となるもの自体がすでに「直感」としてそこにある。そこにはいつでも二つのありようの直感があつて、それぞれが互いに重畳しながら循環している。それが「直感が直感を分析する」のありようであつた。

だが、初刊本で「心の問題」と関連して「直感」について論じたありようは、今述べたありようとは微妙な、あるいは逆に決定的な差異がある。「直感」とは別に「心」が指定され、そのうえで「直感」が論じられていたからである。そして、今回「神話・民話」が指定され、そこで「直感」が論じられる。そこにもまた微妙な、もしかすると決定的な変化の可能性が想定される。

「心」と関連させた「直感論」においてはそれが最初の直感論であるにふさわしく「直感」概念はあいまいであり、

あいまいであるがゆえに「直感」概念に近い「心」が主題化された。だが、今回は「直感が直感を分析する」を通じて「直感」概念はかなりの程度はつきりしてきていて、「心」と関連させて取り上げたときは状況がかなり違っている。「直感」の本質としてある「あいまいさ」のことを除けば、つまり「直感」概念を説明するということであれば材料の豊かさはそれが当を得ているかどうかは別にしても数段増している。

今回「神話・民話」が取り上げられているのは、そこに特段の意図や意味があつてのことではない。もともと筆者は以前から「神話」と「民話」に馴染んでいたが、それは単に関心があつたという程度のことである。筆者にとつて「神話」や「民話」の根源のありようがこれまで確かなものとしてとらえられたことはいまだかつて一度もない。したがつて本書での進み行きはこの謎を追うものになるはずだが、そうかと言ってそのことが主たる目的ではなく、引き続き「直感」概念を問うことが本来である。

「神話」や「民話」への問いに直感が絡むとき、「神話」であれ「民話」であれそのありようにならず変化が生じることがありうる。「神話」や「民話」が今ここにおいてどのようにあるかもまた問われるからである。「神話」や「民話」はもはや単に昔の、古代の、原始のそれではなくなりうる。そのように問う直感がそれらを今ここに生き返らせることがありうるからである。ましてや「直感」への問いが前面に出ることが本来であるとすれば、なおさらそうである。このことを換言すれば「現代における神話や民話とはどのようなか」と最終的に問われるかもしれないし、そのように今ここで述べること自体すでにそのことを問うていることの明かしであるかもしれない。実際すでに「事」はこうして始まり、ここでの「事」はずでにして「神話」や「民話」に染まり始めている。

二〇一二年六月

著者

直感の原型―「神話」と「民話」―

目次

はじめに…………… i

第一部 理論編——直感の原型——…………… 1

第一章 伝承と直感…………… 2

第一節 口頭伝承と直感…………… 6

第二節 文字伝承と直感…………… 12

第二章 神話と直感…………… 24

第三章 民話・物語と直感…………… 36

第一節 民話…………… 36

第二節 物語…………… 41

(一) 『源氏物語』…………… 46

(二) 『遠野物語』…………… 68

第四章 神話思考と直感思考——レヴィ＝ストロース理論とユング理論の対比——…………… 80

第一節 神話思考…………… 82

第二節 直感思考…………… 92

第二部 応用編―『古事記』とアイヌ神謡・民話―

第一章 『古事記』

第二章 アイヌの神謡・民話

あとがき

105

110

156

184

